

マルクス・エンゲルスにおける 世界市場と恐慌

関 下 稔

I はじめに

この数年来、わが国の国際経済研究の分野においては、マルクス経済学者によって、その理論的中心課題を検討し直して、整理しようとする努力がなされてきた。その契機のひとつとなったものは、1965年1月に中央大学で行なわれた国際経済研究会主催のシンポジウム「国際経済研究の理論的体系化に向って」(その内容は『世界経済評論』1966年3月号に収録)であったように思われる。以来、この研究会は毎年続けられ、多くの諸問題が検討され¹⁾、また、そこから発展させて、参加した論者による整理、総括なども行なわれてきた²⁾。

ここで取扱かわれてきた問題は、いずれも、マルクス経済学の立場から国際経済研究を行なおうとする際には、ぜひとも明らかにしなければならない基本的問題に属するように思われる。本稿で取扱かおうとしているマルクスの『経済学批判体系』とレーニン『帝国主義論』との関係の問題も、そうしたもののひとつとして、これまで取扱かわれてきたと思われる。かつて、原田三郎氏はこのことに関連して次のように指摘された。

『資本論』に対する帝国主義論の理論的関連を明らかにすることの意義は、一般的には、二十世紀の資本主義に対して『資本論』はいかに発展せしめられ

1) その後のテーマを年次順に示せば以下の通りである。『資本輸出の諸問題』(『世界経済評論』1967年3月号所収);『国際経済論と経済学体系』(同、1968年3月、4月号所収);『世界経済の構造変化』(同、1969年3月号所収);『帝国主義の現段階』(同、1970年3月号所収);『戦後日本経済の対外関係』(同、1971年4月号所収)。

2) たとえば、吉信爾「経済学批判体系と『資本論』」、島・宇高・宇佐美編『マルクス経済学体系』第2巻所収、1966年、有斐閣。

るべきかの基準を確認することにあり、特殊的には、これによって制約される帝国主義論の基本理論を通じて、第一次大戦以降の資本主義、いわゆる全般的危機における資本主義に対して帝国主義論をいかに発展せしめていくべきかの基準を発見することにある。これによってまた、ある意味では帝国主義論を見失いつつあるかに見える今日のいわゆる現代資本主義論に、帝国主義論のいぶきを吹きこむよすがとすることもできるであろう。』⁹⁾ 氏自身の積極的展開は別としても、この指摘の中には、今日でも依然として妥当なものが含まれているように思われる。すなわち、レーニン『帝国主義論』がマルクスの「体系」からのどのような発展であったかを、歴史的過程をふまえながら明らかにすることであり、そのことによって、同時に、『帝国主義論』が「体系」の継続でありながらも、新しい段階を画するものでもあることを明らかにし、それを通じて、現代帝国主義の構造と運動法則を解明するにあたっての方法的示唆をえようとするものである。ここに、われわれがこの問題を取扱かうにあたっての基本的な問題意識がある。

さらに、これを国際経済研究分野の仕事としては、両者の関係を考える際のもっとも基本的な事実としての歴史的前提の相違——すなわち、マルクスの「体系」における「世界市場」とレーニン『帝国主義論』における「世界経済」——の問題を、その中心にすえて、両者の関係を検討することが不可欠であろう。

もちろん、両者の関係を本格的に論じようとすれば、あらかじめ、両者そのものが検討されていることが必要であろうし、本筋でもあろう。しかし、ここでは、そのためのいわば序論的作業として、さきにあげた、この数年来、国際経済研究分野において展開されてきた議論の主要潮流のいくつかについて批判的検討を行ない、あわせて筆者の見解を、エンゲルスの晩年の著作を中心に述べることにしたい。

3) 原田三郎「帝国主義論の理論的位置」、東北大『経済学』第53号、1959年10月、3ページ。

II

マルクスの「体系」とレーニン『帝国主義論』との関係を取扱かうにあたって、従来、ぬきさしならないひとつの偏向がひそんでいたように思われる。それは、マルクスの「体系」あるいは『資本論』にたいする過度の依拠、あるいは一種の信仰ぶりがうかがわれることである。より正確に言えば、帝国主義段階を含む、資本主義の全過程にわたる経済現象の理論はすべて、マルクスの「体系」のプランにもとづき、それを内容的に豊富化することによって可能だとする傾向である。たとえば、宮崎犀一氏は次のように述べている。

「現存の唯一の国際経済体系化の方法であるマルクス・プランの所定範囲のうちに、レーニンの分析成果はおろか、16世紀から現代までの国際経済の発展過程をも適宜位置づけるような目標をもって、具体的な理論構成……を意図すること、このため既存の『資本論』への完全な立脚はもちろんのこと、「植民地」や「世界市場」等の未知の国際経済的諸範疇の創出に際して……マニュ時代・大工業時代・帝国主義時代それぞれの植民地あるいは世界市場諸形態を上向的に規定し包摂してゆくような構想に立つこと、みぎのような意図や構想が研究実践の進行過程で越えがたい障碍や新しい関係に遭遇したときに、はじめて原プランの拡充・修正・変更、あるいは新プランの制作が必要になること。」⁴⁾あるいは、簡単にいえば、「マルクスの体系がブルジョア『経済学批判』である限り、いわゆる帝国主義論も、一般的危機の経済学も、すべて……体系に包括される」⁵⁾と主張されているのである。

こうした傾向は、堀晋作氏になると、さらに進んでマルクスの「体系」の個々の範疇とレーニン『帝国主義論』のそれとの直接的な対応にまで論理を進められる。

マルクスの集積と集中の理論は、資本制的蓄積の一般的法則として『資本

4) 『世界経済評論』1966年3月号、6ページ。

5) 宮崎犀一『経済原論の方法』上、未来社、156ページ。

論』第一巻第二章において展開されているが、「レーニン帝国主義論の第一章は、このマルクスの集積と集中の理論を、全く継承しているといってもさしつかえない」⁶⁾。同様に、『帝国主義論』第二章「銀行とその新しい役割」および第三章「金融資本と金融寡頭制」における論理的向上も「資本一般の理論のなかにすでに展開され、マルクス基礎規定にもとづいて、とくに資本論、第三巻、第二十七章、『資本制の生産における信用の役割』を中心とする第五篇、利子生み資本の諸章の諸範疇を、帝国主義段階における金融資本の支配的成立の必然性の論理に挙げて動員することによってなされている、と読むことができる」⁷⁾とされる。

こうした傾向にたいしては、佐藤金三郎氏が「論理＝歴史説」の「論理主義」的偏向であるとし、「マルクスの『経済学批判』体系プランの現実的立脚点である19世紀中ごろの歴史的現実と、レーニン『帝国主義論』の、さらにはまたこんにちのわれわれのよってたつ歴史的現実との相違が無視され、すべては偉大なマルクスに、その体系プランのうちに解消されるという危険をふくむもの」⁸⁾との批判をされている。

だがここでは、こうした偏向にたいして、極めて鋭い疑問を提起した杉本昭七氏の所説をみることにしたい。氏が「マルクス経済学の体系化に関する根本問題」において提起した問題は、なによりも、マルクスの「体系」とレーニン『帝国主義論』との間に横たわる、歴史的発展条件の相違からくる質的ながいである。それを氏は、社会変革との関連でみていくという立場から、最終範疇(矛盾の爆発が必然化される)に注目し、その相違を「体系」の「世界市場」にたいし、『帝国主義論』の「世界経済」として明確にした。そして、これとの関連において、もうひとつの問題、国際経済論と「体系」・『帝国主義論』との間の質的ながい問題を提起したものと理解される⁹⁾。

6) 『世界経済評論』1967年3月号, 28ページ。

7) 同, 29ページ。

8) 佐藤金三郎「『資本論』と宇野経済学」新評論, 222ページ。

9) 杉本昭七「マルクス経済学の体系化に関する根本問題」、『経済評論』1967年2月号, 145-163ページ。

この氏の問題提起は、なによりも前述の宮崎氏や堀氏にたいする批判としては正しいし、またその意味において極めて鋭い指摘であったと思われる。だがそれとともに、他面において、氏のもっていた意図とは異なる誤解をも生む面も合わせもっていたように思われる。たとえば、見田石介氏は、杉本氏がマルクスの「体系」を内容的に豊富化することによって、全ての経済事象の説明は可能だとする思考方法にたいして加えている批判は正しいとしながらも、杉本氏がそれにとどまらず、すべての事象の理論化のために、その萌芽や基本原理をマルクスの「体系」のうちに求めることをも同時に誤りであり、有害だとするのはゆきすぎであり、「いっさいの科学を否定すること」につながるとされている¹⁰⁾。しかし、ここでは、これ以上詳論することはさけ、杉本氏が鋭く問題提起した、「体系」と『帝国主義論』との間に横たわる、歴史的発展条件の相違からくる質的相違の問題、その相違を構成する基本的な事実としての「世界市場」と「世界経済」の問題について考えてみよう。

杉本氏によれば、「体系」の最終範疇は「世界市場」であるのにたいし、『帝国主義論』のそれは「世界経済」であるが、後者にたいしては独占資本主義段階への移行と関連していることが指摘されながらも、それと「マルクスの『経済学批判体系』および『帝国主義論』の論理展開との関連については、これまで全然論じられなかった」¹¹⁾ことは不思議であるとされる。そして、両者における質的差異を明確にしたうえで、その概念規定については「『世界市場』は商品流通の範疇に属し、『世界経済』は、資本輸出による国際的からみあいを含意していることに関しては意見の一致をみている」とされながら、氏自身の主張としては、レーニンの考え方として、彼にあっては「一定の生産様式を前提とする国内市場ならびに国際市場の総体が世界市場であり、同じく一定の生産様式を前提とする各国の経済ならびに国際経済の総体が世界経済である」¹²⁾

10) 見田石介「『資本論』・『帝国主義論』・国際経済論」、大阪市大『経済学雑誌』1967年5月号、21-37ページ。

11) 杉本昭七、前掲書、155ページ。

12) 同、154ページ。

と考えていたとされる。

だが、この氏の見解は、はたして妥当であろうか。「世界市場」と「世界経済」という形で両者における質的差異を明確にすることの意義はわかるにしても、前者から後者への発展は論理的過程としてだけではなく、歴史的過程としても説明されねばならないだろう。そう考えると、マルクスが世界市場を二重の意味——すなわち、前提としても、結果としても——でとらえていたように、世界経済もまた、前提としてばかりでなく結果としても把握されねばならず、そこにおいて、結果としての世界市場における発展が前提としての世界経済を作りだしたことが説明されねばならないだろう。さらに、マルクスの「世界市場」を流通概念に、そしてレーニンの「世界経済」を世界市場プラス資本輸出としての生産を含む概念であると簡単に言い切れるであろうか。すなわち、マルクスの『世界市場』（結果としての）は単なる流通上の概念であろうか。そしてまた、レーニンの「世界経済」は世界市場プラス資本輸出であろうか。これらの疑問が生じてくる。

この疑問を解くためには、同様の問題意識をもちながらも、別の角度から接近されているように思われる吉信庸氏の見解をみる必要があるように考えられる。吉信氏は「体系」の後半体系の検討を含め、国際経済研究の理論的体系化に戦後一貫して取組まれてきた一人であるが、この「体系」と『帝国主義論』との関係について氏がこれまで述べてきたことをまとめるとおよそ次のようになるだろう。

マルクスの「体系」は、現実の資本主義の歴史が、世界市場を、前提としてばかりでなく、それ自身の発展の結果としても必要とし、そこにおける諸矛盾の爆発が恐慌として現われたという事実にもとづき、それを論理体系として展開しようとしたものである。したがって、最終範疇である「世界市場」においては、生産は全体として指定され、諸契機の前全てが同様に指定される。同時に、そこでは全ての矛盾が登場し、恐慌はこの矛盾の爆発である。しかし、それは資本制的解決でもあるからして、階級闘争を激化させ、革命を促進させはする

が、そのものの成就に直結するものではない。いずれにせよ、恐慌が生みだすものは、社会革命の物質的可能性である資本制的蓄積の歴史的傾向を確実に促進せしめる条件である。「この歴史的傾向は、特定の高さにまで達すると質的变化を遂げ、資本主義の特殊な歴史的段階を規定する事態——要因——に転化せざるをえない。すなわち、生産——生産手段と労働力——の集積は自由競争にかわって独占を生みだし、世界市場のたえざる拡張は地球の終局的分割に導いたのである。」¹³⁾

このように氏は、『帝国主義論』は「体系」の継続、発展として、最終範疇である「世界市場」における矛盾の爆発＝恐慌が生産の集積を促進し、それが独占を生みだすものととらえている。

と同時に、この質的転化を生みだす歴史的前提そのものの変化にも注目しており、それを「体系」の「世界市場」にたいして「世界経済」として把握する。

「マルクスはその著作において、世界経済ではなく世界市場という経済学的範疇を使用することで終始した。……世界経済という範疇は、マルクス主義の古典著作者のなかではレーニンによってはじめて一般的にその著作のなかにおいて使用されるようになった。」¹⁴⁾「それ（＝世界経済）は、古い世界市場を基礎として、レーニンが指摘したそれにつけくわえられる新しい経済現象を包括する概念である。その新しい経済現象のもっとも重要なものは、レーニンが『帝国主義は、とりわけ資本の輸出である』……といているように、資本の輸出である。」¹⁵⁾しかも、この資本輸出が典型的となった時代の概念である。だから、「世界市場が資本主義（産業資本）の前提であり結果であったように、世界経済は帝国主義（金融資本）の前提であり結果である」¹⁶⁾。このように両者の質的ながりが歴史的過程を基礎にして位置づけられている。

しかも、「世界市場」から「世界経済」への転化にあたっては、「前提とし

13) 吉信甫「経済学批判体系と『資本論』」前掲論文、248ページ。

14) 吉信甫「レーニンと世界経済論」、『経済』1970年4月号、247ページ。

15)、16) 同、150ページ。

ての世界経済は、なによりもまず結果としての世界市場の形成とその不断の拡張である」¹⁷⁾ としながら、さらに、この世界市場の平和的拡張が、金融資本の支配によって生みだされた結果としての世界経済において最終的限界にたつすると、再分割のための闘争が現われるとし、「ここでの矛盾の爆発は、世界恐慌だけではなくて世界戦争としてもあらわれざるをえない」¹⁸⁾ とする。このように考えると、世界経済は「たんに世界市場プラス資本輸出、すなわち市場関係をのりこえた資本主義的生産関係の世界的支配といったかたちで」¹⁹⁾ 把握することはできない。なぜなら、そうした把握にたつと、『世界の分割』は世界経済にとってどうでもよい内容となり、それから重要な歴史的規定がずりおちてしまう」²⁰⁾ からであるとしている。

以上の吉信氏の指摘は妥当であると思われる、それによって杉本氏の見解における不十分さを補足できると思われる。

杉本氏は、「体系」と『帝国主義論』との間における質的なちがいに注目し、それをなによりも「世界市場」と「世界経済」として明確にした。しかし、宮崎氏や堀氏のように「体系」と『帝国主義論』との直結を説く論者にたいする批判に力点がおかれすぎ、前者から後者への発展、継続の側面が看過されたように思われる。それを吉信氏にあっては、一方では「世界市場」と「世界経済」という形で両者のもつ歴史的前提の相違を明確にしながら、他方においては、前者における発展（結果としての世界市場における競争と拡大）が恐慌を生み、この恐慌の生みだす集積が一定の高さで質的転化をとげ、独占に転化するとおいて、後者が前者の発展の結果であることをも明らかにした。「体系」と『帝国主義論』との関係の問題は、このように二様の意味に、すなわち、継続、発展であると同時に質的なちがいをもったものとしても、把握されることが必要である。

だが、こうした吉信氏の指摘もそれだけでは十分とは思われない。さしあた

17) 同, 150-151ページ。

18), 19), 20) 同, 151ページ。

っては、二点において問題をだしたい。

第一に、われわれはマルクスの「体系」の前半（資本・土地所有・賃労働）から後半（国家・外国貿易・世界市場）への移行において、経済過程における矛盾を政治的に総括するものとして「国家」をとらえ、この上部構造たる「国家」の下部構造への反作用としてその内容を把握した²¹⁾。だが、最終範疇における諸矛盾の爆発として恐慌をとらえ、そこに革命の物質的基礎をみながら、同時にそれが資本制的解決でもあるというところから、生産の集積の特定の高さでの質的転化→独占をひきだした。ここにおいては当然、経済過程そのものの論理展開と同時に、そこにおける矛盾から上部構造たる「国家」の反作用の問題が取上げられるはずだと思われる。そうでないと、「国家」は後半体系の最初にのみ登場するだけの中途半端なものとなってしまいうだろう。この問題にたいしては、吉信氏は世界市場、世界経済の問題における国家の意義を強調されてはいるが²²⁾、十分に説明されておられないように思われる。

第二に、マルクスやエンゲルス自身が産業資本主義から独占資本主義への転化についてどう考えていたかという問題である。もちろん、マルクス、エンゲルスがこの転化が完全に行なわれる時代まで生きていたわけではないが、すくなくともエンゲルスにあっては、1895年にいたるまで、かなりその変化をみているし、事実、そのことに言及もしている。したがって、晩年の彼らが、資本主義の新しい変化にたいしどのようにみていたかを検討することは、「体系」と『帝国主義論』との関係を見る際に不可欠であると思われる。従来、このことにたいし、あまり注意が払われてこなかったのは何故であろうか。

以下において、われわれは晩年のエンゲルスの著作を中心にして、杉本、吉信両氏によって展開されてきた問題意識を発展させながら、必要な補足を行なっていきたいと思う。

21) くわしくは拙稿「ブルジョア社会の国家形態での総括と後半体系」、『経済論叢』第106巻 第5号を参照のこと。

22) 吉信蕭「国際経済学における国家範疇をめぐって」、『国際経済』第18号、日本評論社、13ページ。

III

マルクスの「体系」にあっては世界市場が資本主義（産業資本）の前提であると同時に結果でもある、としてとらえられていたことについては度々言及した。それをマルクスの言葉によって確かめてみよう。

「商品流通は資本の出発点である。商品生産と、発達した商品流通すなわち商業とは、資本が成立するための歴史的な前提をなしている。世界商業と世界市場とは、16世紀に資本の近代的生活史を開くのである。」²³⁾

「16世紀に、また一部分は17世紀にも、商業の突然の拡張や新たな世界市場の創造が古い生産様式の没落と資本主義的生産様式の興隆とに優勢な影響を及ぼしたとすれば、このことはまた、逆に、すでに創出されていた資本主義的生産様式の基礎の上で起きたのである。世界市場は、それ自身、この生産様式の基礎をなしている。他方、この生産様式に内在するところの、絶えずより大きな規模で生産するという必然性は、世界市場の不断の拡張に駆りたてるのであり、したがってここでは、商業が産業を変革するのではなく、産業が絶えず商業を変革するのである。」²⁴⁾

「ただ対外貿易だけが、市場の世界市場への発展だけが、貨幣を世界貨幣に発展させ、抽象的労働を社会的労働に発展させるのである。……資本主義的生産は、価値に、すなわち生産物に含まれている労働の社会的労働としての発展に、もとづいている。しかし、これはただ、対外貿易と世界市場という基礎の上でのみのことである。だから、これは資本主義的生産の前提でもあれば結果でもあるのである。」²⁵⁾

そして、この発展の結果は周期的に現われる恐慌であった。

23) K. Marx, *Das Kapital*, Bd. 1, *Marx-Engels Werke*, Bd. 23, Dietz Verlag, S. 161, 邦訳、大月版全集、第23巻第1分冊、191ページ。

24) K. Marx, *Das Kapital*, Bd. 3, *Marx-Engels Werke*, Bd. 25, SS. 345-346, 邦訳、大月版全集、第25巻第2分冊、415ページ。

25) K. Marx, *Theorien über den Mehrwert* (Vierter Band des „Kapitals“), *Marx-Engels Werke*, Bd. 26, Dritter Teil, S. 250, 邦訳、大月版全集、第26巻Ⅲ、332-333ページ。

「工場制度の巨大な突然的な拡張可能性と、その世界市場への依存性とは、必然的に、熱病的な生産とそれに続く市場の過剰を生みだし、市場が収縮すれば麻痺状態が現われる。産業の生活は、中位の活況、繁栄、過剰生産、恐慌、停滞という諸時期の一系列に転化される。」²⁶⁾

「機械工業が深く根をおろして国内の全生産に優勢な影響を及ぼすようになったとき、機械工業によって対外貿易が国内商業を追い越し始めたとき、世界市場が新世界で、アジアやオーストラリアで、次から次へと広大な領域を併合したとき、最後に、競争に加わる工業国の数が十分なものになったとき、このとき以来はじめてかの絶えず再生産される循環は始まったのであって、この循環の相次いで現われる諸局面は数年間を包括していて、それはつねに一つの一般の恐慌に、すなわち一循環の終点でもあればまた新たな一循環の出発点でもある一般的恐慌に、帰着するのである。」²⁷⁾

このような資本主義の歴史過程にもとづいて、マルクスの「体系」は周知のように「資本・土地所有・賃労働、それから国家・外国貿易・世界市場」という六部編成よりなり、この最終範疇「世界市場」において、資本主義の矛盾の爆発として恐慌をとらえ、そこに革命の客観的根拠をみていたものといえる。

「世界市場が終篇をなす。この世界市場の篇では、生産は全体として措定され、またその諸契機のいずれもが同様に措定されている。だが同時にそこではすべての矛盾が過程に登場する。世界市場はこのばあい、またも同様に全体の前提をなし、その担い手をなす。そのさい恐慌は、前提をのりこえることへの全般的な指示であり、新しい歴史形態の受容への促迫である。」²⁸⁾

「世界市場恐慌は、ブルジョアの経済のあらゆる矛盾の現実的総括および暴力的調整としてつかまなければならない。」²⁹⁾あるいは、「ブルジョア的生産の

26) K. Marx, *Das Kapital*, Bd. 1, *Werke*, 23, S. 476, 前掲邦訳, 第23巻第1分冊, 592ページ。

27) *Ibid.*, S. 662, 邦訳, 第23巻第2分冊, 825ページ。この箇所はフランス語版にのみ挿入されている。

28) K. Marx, *Grundrisse der Kritik der politischen Ökonomie, 1857-1858*, Dietz Verlag, Berlin, 1953, S. 139, 高木幸二郎監訳, 大月書店, 第1分冊, 149ページ。

29) K. Marx, *Theorien über den Mehrwert, Werke*, Bd. 26, Zweiter Teil, S. 511, 前掲邦訳, 第2分冊, 689ページ。

すべての矛盾は、一般的世界市場恐慌において集散的に爆発³⁰⁾する。または、「19世紀の諸商業恐慌、とくに1825年と1836年の大恐慌は……ブルジョアの生産過程のあらゆる要素の矛盾が爆発する世界市場の大暴風雨であった」³¹⁾。

このように位置づけられた恐慌を資本主義の基本的矛盾と結びつけて述べているのはエンゲルスである。彼は、「社会的生産」と「資本主義的取得」とがあいれないこと（不調和、矛盾）を資本主義の基本矛盾と考え、この基本矛盾は「プロレタリアートとブルジョアジーとの対立」および「個々の工場内における生産の組織化と全体としての社会における生産の無政府性との対立」として現象し、資本主義的生産様式は「この生産様式に内在する矛盾のこの二つの現象形態のなかを運動する」³²⁾ものとみていた。そして「恐慌においては、社会的生産と資本主義的取得とのあいだの矛盾が暴力的に爆発する」³³⁾とのかけて、恐慌をこの矛盾の暴力的爆発形態と考えていたのである。したがって、そこにおいては、「一方では資本主義的生産様式は……これ以上これらの生産力を管理してゆく能力がないということの動きのとれない証拠をつきつける」とともに、「他方では、これらの生産力そのものが、ますます力づくこの矛盾の揚棄をせまる」³⁴⁾ことになる。

さらに、この恐慌は資本主義の危機でもあるというところから社会変革を強制する手段としても把握されていた。

「恐慌が資本主義的生産様式から必然的に生まれてくること、またこれがこの生産様式そのものの危機という意義、社会変革を強制する手段という意義をもっている。」³⁵⁾

30) *Ibid.*, S. 535, 邦訳, 722ページ。

31) K. Marx, Zur Kritik der politischen Ökonomie, *Marx-Engels Werke*, Bd. 13, S. 156, 邦訳, 大月版全集, 第13巻, 158ページ。

32) F. Engels, Herrn Eugen Dühring's Unwälzung der Wissenschaft. Philosophic. politischen Ökonomie. Sozialismus, *Marx-Engels Werke*, Bd. 20, SS. 252-255, 邦訳, 大月版全集, 第20巻, 279-282ページ。

33) *Ibid.*, SS. 257-258, 邦訳, 285ページ。

34) *Ibid.*, S. 258, 邦訳, 286ページ。

35) *Ibid.*, S. 268, 邦訳, 296ページ。

「1847年の世界商業恐慌が、2月と3月の革命のほんとうの生みの親であったこと」³⁶⁾。あるいは「新しい革命は新しい恐慌につづいてのみ起こりうる。しかし革命はまた、恐慌が確実であるように確実である。」³⁷⁾

以上、われわれは「体系」の最終範疇「世界市場」およびそこにおける恐慌、基本的矛盾、革命などの関連をマルクス・エンゲルスにそくしてみてきた。

IV

ここでは、その後の資本主義の新しい変化をマルクス・エンゲルスがどのようにみていたかを検討したいが、その際、最終範疇である「世界市場」においてどのような変化を予測していたか、からみてみよう。

マルクスは『資本論』において、資本主義的生産の三つの主要な事実として、少数者の手中への生産手段の集積、労働の社会化、世界市場の形成をあげているが³⁸⁾、同じことを第一巻、第七篇、第二四章第七節「資本主義的蓄積の歴史的傾向」において次のように説明している。

「この集中、すなわち少数の資本家による多数の資本家の収奪と手を携えて、ますます大きくなる規模での労働過程の協業的形態、科学的意識的な技術的応用、土地の計画的利用、共同的にしか使えない労働手段への労働手段の転化、結合的社会的労働の生産手段としての使用によるすべての生産手段の節約、世界市場の網のなかへの世界各国民の組入れが発展し、したがってまた資本主義体制の国際的性格が発展する。」³⁹⁾これは資本主義的蓄積の歴史的傾向であり、それによって搾取が強まるが、同時に、この生産過程そのものの機構によって訓練され、結合される労働者階級の反抗もまた増大し、ついには収奪者が収奪される時代が到来するとのべている。

36) K. Marx, Die Klassenkämpfe in Frankreich 1848 bis 1850, *Marx-Engels Werke*, Bd. 7, S. 512, 邦訳, 大月版全集, 第7巻, 519ページ。

37) *Ibid.*, S. 98, 邦訳, 94ページ。

38) K. Marx, *Das Kapital*, Bd. 3, SS. 276-277, 前掲邦訳, 第25巻第2分冊, 333-334ページ。

39) *Ibid.*, Bd. 1, SS. 790-791, 邦訳, 第23巻第2分冊, 994-995ページ。

そしてその際、恐慌はこの歴史的傾向を確実に促進せしめる条件を提供するものである。また、「10年の循環周期で運動するイギリス産業の発展期（1815—1870年）のあいだは、いつでも、恐慌の前の最後の繁栄期の最高限が、次にくる繁栄期の最低限として再現し、それからまたそれよりもずっと高い新たな最高限に上がって行く」⁴⁰⁾ のであり、このように世界市場が拡張しているかぎりは、産業循環に変化はないとみていた。

だが、この恐慌が1870年代に入ると変化してきたとエンゲルスはのべる。

「1866年の恐慌は、事実、短期で軽微な活況を1873年ごろともないはしたが、しかし、それは長つづきしなかった。事実われわれは、恐慌のおこるはずであった時期、つまり1877年か1878年には、完全な恐慌を経験しはしなかった。だがわれわれは、1876年このかた、いっさいの支配的な工業部門が慢性的な停滞状態に陥っているなかですごしている。完全な崩壊もやっこないし、またわれわれが恐慌の前後には当然もつ権利があると信じていた、待望ひさしい好況期もやっこないので、非常にひどい沈滞、あらゆる事業にたいするあらゆる市場の慢性的な過充、これこそわれわれが、ほぼ10年このかた経験してきた状態である。」⁴¹⁾

「最近の大きな一般的恐慌以来一つの転換が現われてきた。従来は循環周期が10年だった周期的過程の急性的形態は、相対的に短くて弱い景気好転と相対的に長くて決定的でない不況との、より慢性的な、より長く引き伸ばされた、いろいろな工業国に別々の時期に分かれて現われる交替に変わったように見える。」⁴²⁾

そして、その原因をアメリカ、ドイツ等における資本主義の発展とそのことからもたらされるイギリスの「工業独占」の崩壊、およびカルテルと保護関税

40) *Ibid.*, Bd. 3, S. 517, 邦訳, 第25巻第2分冊, 641ページ。

41) F. Engels, *Die Lage der arbeitenden Klasse in England*, *Marx-Engels Werke*, Bd. 2, S. 646, 邦訳, 大月版全集, 第2巻, 675ページ。

42) K. Marx, *Das Kapital*, Bd. 3, S. 507, 前掲邦訳, 第25巻第2分冊, 626ページ。エンゲルスによる補注。

の形態をとった自由競争の制限→独占の出現に求めている。

「1867年の最近の一般的恐慌以来大きな変化が現われている。交通機関の非常な拡張……は、世界市場をはじめて現実につくりだした。それまでは工業を独占していたイギリスと並んで、互いに競争するいくつかの工業国が現われた。ヨーロッパの過剰資本の投下のためには、どの大陸でも無限により大きくより多様な領域が開かれているので、この資本はより広く分散されて、局地的な過度の投機はより容易に克服される。すべてこれらのことによって、以前からの、恐慌の根源や恐慌の発生の機会は、たいていは除かれているかまたは非常に弱められている。それとともに、国内市場での競争はカルテルやトラストの出現によって後退し、他方、外国市場での競争はイギリス以外のすべての大工業国が張りめぐらしている保護関税によって制限される。」⁴³⁾

「近代工業の条件、つまり蒸気力と機械は燃料とくに石炭のあるところではどこでもつくりだすことができる。そしてイギリス以外の国々、すなわちフランス、ドイツ、ベルギー、アメリカ、ロシアにさえも、石炭はある。

……彼らは自分の国のためばかりでなく、そのほかの世界のためにも製造しはじめた。そしてその結果は、イギリスがほぼ一世紀にわたってにぎってきた工業独占が、いまではとりかえしのつかないほどにうちやぶられていることである。」⁴⁴⁾

以上のことから明らかなことは、マルクスが資本制的蓄積の歴史的傾向であるとみなした資本制的生産の三つの主要事態——少数者の手中への生産手段の集積、労働の社会化、世界市場の形成(結果としての世界市場)——は、産業循環のくりかえしを通じて、たえず強まっていく。そして、この歴史的傾向は特定の高さで質的転化をとげ、資本主義の特殊な歴史的段階を規定する要因になるのだが、それは生産の集積が自由競争にかかわって独占を生みだし、世界市場の不断の拡張が地球の終局的分割を導いたことである。レーニンはそれを次のよ

43) *Ibid.*, S. 507, 邦訳, 626ページ。

44) F. Engels, *Die Lage der arbeitenden Klasse in England*, S. 646, 前掲邦訳, 675ページ。

うに述べている。

「資本主義の過去の『平和な』時代が、なににもとづいて現代の帝国主義の時代と交替したかを、思いだしてみよう。それは、自由競争が独占的資本家団体に席をゆずったこと、および、地球全体が分割されてしまったことにもとづいている。この二つの事実（と要因）が真に世界的な意義をもっていることは、あきらかである。」⁴⁵⁾

そこにいたる過程として、一方では、イギリスの工業独占の崩壊に象徴される資本主義の国際的性格の発展があり、他方では、カルテル、トラストなどの独占体の成立とそれと結びついた保護関税とが対外的にも対内的にも競争を制限していくことがある。こうしたものが、世界市場における拡張を、あるいは、より正確に言えば、「平和的」拡張を困難にしていることにエンゲルスは注目しており、それが恐慌に作用し、事態を変化させていることに注意を喚起しているのである。事態がさらに進めば、上にのべた質的転化が生じるのだが、ここでは、エンゲルスがそこにいたる変化の要因を適確につかみ、しかもその推移を注意深くみつめていることを指摘しておこう。

今度は、ここで指摘されているカルテル、トラストにたいしてエンゲルスがどのようにみていたかについて論述してみよう。

エンゲルスはわれわれがさきに基本的矛盾と恐慌との関係をみた際に検討した『反デューリング論』から三つの章をピックアップして『空想から科学へ』を編集した。その際、いくつかの個所で補足を行なっているが、そのひとつにこのトラストの問題がある。恐慌を資本主義の基本的矛盾（生産の社会的性格と取得の私的、資本主義の形態との間の不調和）の爆発とみなしたが、この恐慌となってあらわれるものは、一方では、資本主義がこれらの生産力を管理してゆく能力がないことの証拠をつきつけるとともに、他方では、これらの生産力そのものが、ますますこの矛盾の揚棄をせまるようになること、つまり、資本という性質から解放して、社会的生産力としての性格を実際に承認するよう

45) 『レーニン全集』第21巻、大月書店、222ページ。

にせまるようになることだとも見ていた。そして、これはプロレタリアートとブルジョアジーとの階級対立を激化させるとともに、工場内の組織性と生産全体の無政府性との対立をも激化させるが、それはそれで政治的な総括としての国家の出現をひきだすものであった。それと同時に、生産の内部においても、「資本家自身に、およそ資本関係の内部で可能なかぎりこの生産力を社会的生産力として取扱かうことを、ますます余儀なくさせる」⁴⁶⁾ ようになるのであり、そのようなものとして、エンゲルスは株式会社、カルテル、国有化（資本主義的）、をあげているのである。

「産業の好況期は、信用を無制限に膨脹させることによって、また恐慌そのものも、大規模な資本主義的倒産をつうじて、各種の株式会社においてわれわれがみるような、大量の生産手段の社会化の形態に向かって押しすすめる。……

「ある発展段階に達すると、この形態でさえもはや十分ではなくなる。同一産業部門に属する国内の大生産者たちは相結んで、「トラスト」、すなわち生産の規制を目的とする連合体をつくる。……だが、このようなトラストは、不況にあうと、たいていはたちまちばらばらになってしまうので、まさにそのためにトラストはいっそう集積の高い社会化にむかって駆りたてられる。一産業部門全体がただ一つの大株式会社に変わり、国内の競争はこの一つの会社の国内的独占に席をゆずる。……

「トラストにおいては、自由競争は独占に転化し、資本主義社会の無計画的な生産は、押しいてくる社会主義社会の計画的な生産に降伏する。……

「いずれにせよ、トラストがあろうとなかろうと、けっきょくは資本主義社会の公式の代表者である国家が、生産の指揮を引きうけなければならなくなる。このように国家的所有に転化させる必要がはじめに現われてくるのは、大規模な通信施設、すなわち、郵便、電信、鉄道においてである。」⁴⁷⁾

46) F. Engels, Die Entwicklung des Sozialismus von der Utopie zur Wissenschaft, *Marx-Engels Werke*, Bd. 19, S. 220, 邦訳, 大月版全集, 第19巻, 217ページ。

47) *Ibid.*, SS. 220-221, 邦訳, 217-218ページ。

しかし、株式会社、トラスト、国有化（資本主義的）は、資本関係の内部での可能なかぎりでの社会的生産力としての取扱いかであるから、その意味では、それがどんなに進展しても、生産力のもつ資本という性質を廃止するものではない。したがって、「資本関係は廃止されないで、むしろ絶頂にまで押しすすめられる」のであり、「この絶頂にのぼりつめたとき、資本関係はひっくりかえる」⁴⁸⁾のである。そして、現実にもそうするためには、政治闘争によって、プロレタリアートが国家権力を掌握しなければならないことは言うまでもない。

このように、エンゲルスは考えていたのだが、同時に、生産の社会化にたいする資本主義的対応の三形態の中でも、とりわけ「国有化」は、そのどんづまりとして、国家そのものに及ぼす作用に注意を払っている。近代国家は、いうまでもなく、「資本主義的生産様式の一般的な外的諸条件を、労働者や、さらに個々の資本家の侵害から守って維持するために、ブルジョア社会が自分のためにつくりだす組織にすぎない」し、その意味では、「本質上は資本家の機関であり、資本家の国家であり、観念上の総資本家である。」⁴⁹⁾（傍点引用者）。ところが、この国家が「ますます多くの生産力を引きついで自分の所有に移せば移すほど」、つまり資本主義的国有化が進めば進むほど、「それはますます現実の総資本家となり、ますます多くの国民を搾取するようになる」⁵⁰⁾のである（傍点引用者）。

社会的生産と資本主義的取得との不調和という資本主義の基本矛盾がプロレタリアートとブルジョアジーの階級対立、および個々の工場内における生産の組織性と全体としての生産の無政府性との間の対立として現象し、そこにおいて、政治的総括として国家が出現し、権力維持のための機能を果す側面が一方ではある。それと同時に、ここでみたように、生産の社会化にともなって、それに資本主義的に対応することによって、「観念上の総資本家」から「現実の総資本家」へと国家が成長をとげていき、そこにおいては、資本主義的生産を改良するための直接経済的な機能をも国家が果す側面が他方にはある。この側

48), 49), 50) *Ibid.*, S. 222, 邦訳, 219ページ。

面での国家の機能を、独占の成立を前にして、エンゲルスは資本主義の新しい変化と結びつけてみていたのである。したがって、彼が恐慌に変化をもたらした要因として、カルテルと保護関税をあげたとき、実は、このような国家の機能、反作用をみていたものと思われる。だから、この保護関税はカルテル関税であり、その点で旧来の保護関税と異なることを明確にしている。

「第一には、近ごろの一般的な保護関税熱であって、それは、なによりもまづ輸出力ある商品を最も多く保護することによって、特に古い保護関税論議から区別される。」⁵¹⁾

このようにみてきたとき、さきに吉信爾氏にたいする問題点の一つとして提起した、最終範疇、および、そこにおける転化をみるさいの国家の反作用の問題にたいするひとつの解答がえられるのではないだろうか。ここにおける国家の機能は、権力維持のための機能、および資本制的生産の改良のための直接経済的な機能の二つがみられるのである。

しかも大事なことは、「体系」の前半から後半への移行にさいしては、主要には、第一の機能が問題にされたとすれば、「体系」から『帝国主義論』への転化においては、それに加えて第二の機能がひきだされ、そのことによって国家がより全面的で、より現実的なものとなったことである。あるいは、別様にいえば、政治と経済との関係がより緊密になったことである。だが、それは、そのことによって、資本主義の危機も深まっていくことでもある。

池上惇氏はこの国家の経済的機能を以下の三つに分類しておられる⁵²⁾。

- ① 階級対立に基因する権力機関そのものの維持のための経済的干渉。
- ② 諸矛盾を一時的に緩和し、資本主義的生産方法を改良するための経済的干渉。
- ③ 資本主義的生産関係の発展につれて克服されるべき運命をもちながら、その発展を補足する本源的蓄積的な経済的機能。

51) K. Marx, Das Kapital, Bd. 3, S. 131, 前掲邦訳, 第25巻第1分冊, 152ページ。エンゲルスによる補注。

52) 池上惇『国家独占資本主義論』有斐閣, 36-37ページ。

そして、第二の機能は、「銀行制度および信用制度の確立の中に最も典型的な姿をみることができる」⁵³⁾とされ、エンゲルスがあげた株式会社、トラスト、国有化につけ加えておられる。また、第三の機能としては、(1)土地、財産への課税にともなう資本と土地の合体、(2)労働条件悪化のための国家的立法、(3)貨幣価値の減少にともなう労賃の圧下と、古い貨幣価値で契約された地主の収奪、(4)生活手段の資本への合体と国内市場の創出、(5)植民制度、租税制度、保護制度、等をあげている⁵⁴⁾。

われわれはその内容をここで検討することはできないが、われわれが展開したことが証明されているものと理解する。ただ、ひとつだけ指摘しておきたいことは、植民制度や保護制度といった本源的蓄積の過程での国家の経済的力能として取扱われるものが、産業資本主義が独占資本主義に転化するにあたって、まったく異なる性格を帯びながらも、再びもちだされることである。特に、植民制度は、資本輸出と結びつけられて、帝国主義における極めて重要な要素として考えられている。この問題についての本格的な検討は別の稿にゆずるが、エンゲルスが『資本論』第三巻の「補遺」の中で、植民制度の変化を次のようにみていたことだけをつけ加えておこう。

取引所、株式会社、トラスト、銀行などの新たな変化を論じたあとで、「(七) について植民。これは今日では純粹に取引所の支店である。取引所の利益のためにヨーロッパの列強は二三年前にアフリカを分割し、フランス人はチュニストとトンキンを略取した、アフリカは直接に諸会社に賃貸され、……またマジョナランドとナタールランドは取引所のためにローズによって取得された。」⁵⁵⁾

最後に、エンゲルスがエルフルト綱領草案にある「資本主義的私的生産の本質に根ざす無計画性」という章句にたいして次のように批判したことをつけ加えておこう。

「わたしも、社会形態としての、経済段階として資本主義的生産、この段階

53) 同書、44ページ。

54) 同書、53ページ。

55) マルクス『資本論』長谷部文雄訳、青木書店、第3部上、69-70ページ。

の内部でいろいろなかたちであられる現象としての資本主義的私的生産ならば知っている。ところで、資本主義的私的生産とは一体どういうものをいうのか？ 個々の企業家による生産のことなら、これは実際もう次第に例外になりつつある。株式会社による資本主義的私的生産は、もう私的生産ではなく、多人数の共同計算による生産である。もしまた株式会社からすすんで、産業部門の全体を支配し独占するトラストにうつるなら、そこでは私的生産がやむだけでなく無計画性もまたやむ。『私的』という句を削除するがよい。そうすればこの章句はともかく我慢できる。⁵⁶⁾

そして、このエンゲルスの指摘を、レーニンは『国家と革命』の中で、すばらしく貴重な指示であるといい、「この指示は、エンゲルスがほかならぬ現代資本主義の変化を注意ぶかく慎重に注意していたこと、そのため、彼がわれわれの時代、帝国主義時代の諸任務をある程度予見できたこと、をしめしている」とのべている。すなわち、このエンゲルスの指示は「現代資本主義すなわち帝国主義を理論的に評価するさいにもっとも根本的なこと、すなわち資本主義が独占資本主義へ転化しつつあることが、とりあげられている」⁵⁷⁾として、極めて高い評価を与えているのである。そして、このレーニンの指摘こそ、われわれが「体系」と『帝国主義論』との関係を見るにあたって、エンゲルスの晩年の著作を注意深く検討しなければならない根拠を明確に物語っているだろう。

V お わ り に

われわれは「体系」と『帝国主義論』との関係を、前者から後者への継続、発展であると同時に、両者は質的に異なるものでもあるとみる視角から、その区別を「体系」の「世界市場」にたいし『帝国主義論』の「世界経済」として

56) F. Engels, Zur Kritik des sozialdemokratischen Programmentwurfs 1891, *Marx-Engels Werke*, Bd. 22, SS. 231-232, 邦訳、『マルクス・エンゲルス選集』大月書店, 第17巻, 379-380ページ。

57) 『レーニン全集』大月書店, 第25巻, 477-478ページ。

把握する杉本、吉信両氏の問題意識を発展させて、主要には、エンゲルスの晩年の著作によって展開してきた。だが、ここでは、従来、看過されてきたエンゲルスの晩年の著作から問題のみてきたのであり、これをさらに、レーニンの側からも接近しないかぎり、十分なものとはならないだろう。それは、次のわれわれの課題である。